

あ と が き

財団法人中央教育研究所
所長 水 沼 文 平

受賞されました先生方おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

中央教育研究所は、東京書籍からの委託を受けまして、1984年にスタートしました東書教育賞の第1回目から論文の審査を行っております。

さて、今年度は210編の応募がございました。今回の応募論文の特徴を3点申し上げますと、1点目はPISAの影響でしょうか、国語（読解力）、算数・数学（数学的リテラシー）、理科（科学的リテラシー）の応募が前年より上回っております。2点目は、少子化、核家族化など社会構造の変化、教員年齢構造の変化、地域との連携の必要性などから学校経営に関する論文が増えております。3点目は、新たな教育課題である特別支援教育、小学校英語などに取り組む論文が多くみられたことです。

論文の題名で使われている用語をみますと、多い順に「主体的」「意欲」「活用」「思考力」「表現力」「言語活動」「生きる力」などを挙げることができます。

新学習指導要領に、

「生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育成することを重視し、その基盤となる言語に関する能力の育成を図ること」

とありますように、列挙しましたタイトルの用語はいずれも新学習指導要領で使用されているキーワードであります。

その中で不思議に思ったことは「思考力」「表現力」と同等に求められている「判断力」という言葉が、論文のタイトルに一つも見いだせなかったことであります。たまたまなかったのかもしれませんが、あるいはこのことが、思考、判断、表現のそれぞれの能力に関する定義づけが明確に認識されていないことからきているのか、「判断力」そのものにさほど重きを置いていないことからきているのか、日本人は一般的に判断力が乏しく他者への依存心が強いといわれていますが、このことを是正すべき弱点とみるのか、日本という国で独自に育まれた協調精神としての長所とみるのかについては、先生方にご教示をいただければありがたいと考えております。

審査は、ICTに関わる論文以外は従来どおり一次審査と最終審査の二段階で行いました。一次審査は、本日ご臨席の東京教育研究所の先生をはじめ、教職経験の豊かな現場の先生、大学の先生に、教科・領域ごとにご審査をいただき、小中学校それぞれ10編の論文を選び出し、最終審査委員会で審査し入賞論文を選定いたしました。ICTに関わる論文は、応募編数が少ないことから応募の19編を3名の最終審査委員の先生方に見ていただきました。このような経緯を経て、最優秀賞2編、優秀賞6編、特別賞2編、奨励賞5編を選定いたしました。

最後に、ご応募をいただきました多くの先生方、そして、ご多忙の中、ご審査に当たっていただきました先生方に御礼を申し上げます。